

福祉に関すること

< 第 2 部会：福祉 >

1．寝屋川のよいところ・わるいところ (よいところ わるいところ)

(寝屋川とは)

寝屋川の良さは、川と山との自然に培われた大阪と京都の中間の「ほっこり」と良いまちで、この良さを福祉に活かしたい。

寝屋川市は密集イメージでレッテルを貼られている。これを払拭する現在の評価と「明るいイメージ」を創出していくことが大切と考える。

(寝屋川のまち)

寝屋川市は、交通至便で物価が安く住みやすい、基本的に便利なまちである。

道が狭く段差も多いので、高齢者等が一人で歩きにくい。

(寝屋川福祉行政に対する評価)

子育て支援を含む福祉問題や環境問題において、当市では他市に先駆けて取り組まれている。

しかし、最近若年層による事件もみられる。

・全ての子どもが心豊かに育っているとは考えにくい。親(その親)の問題・住環境なども関係している。また、比較的地域性にも影響されている。

・福祉の面からも、良い面を打ち出していくべき。

2．寝屋川の福祉を「高齢」「子ども育て」「障がい」「生活困窮」の面からみて

(高齢)

・高齢化で独り暮らしが増えている。最近火事の発生で高齢者の死亡が増えているのでは。

・引きこもり(特に男性の)セルフネグレクトが問題。しかし、自立の気がない人も。

高齢者も自立支援が課題。

(子ども育て)

・子育てでは母親の「わが子」の意識が希薄に。子育てノウハウが伝わらない。親の変化・家庭の変化・離婚の増大など。

・地域によっては問題が集中し、支える人が不足している。

・子どもは施設などに来たとき自分の「名札」があると落ち着く。安心があって自律が育つ。

子ども達が「自分を思ってくれる人がいる」を自覚できることが大切。

(障がい)

・この部会では当事者が参加していない。日常の交流や、多様な参加の場や機会が大切。

障がいある人も誘い出し、交流することが大切。

(生活困窮)

・生活保護は行政責任と認識されている。地域や住宅地で偏りがある。

- ・依存化の問題も大きな課題。モンスターペアレンツ、イチャモンの病んだ現象も問題。
- ・ケースワーカーが不足。問題発生も考えられケアに踏み込めない面もある。
- ・地域と人間関係の変化にいかに対応するかが課題。

やはり自立の促進が課題。

(担い手)

- ・行政、民生・児童委員、社会福祉協議会、施設(公・民)、市民ボランティアの担い手(専門家)の活動があり、このネットワークが大切、これを取り巻く市民と市民の活動を考えていくことが大切。
- ・地域性もあるが民生・児童委員を受けたくないのが現状で、ケースワーカーも不足している。
- ・ボランティア不足は発信方法などが問題。ボランティアでやりがいを感じられるような制度など工夫が必要。(例：ボランティア通貨、感謝状など)

3 . 「安心・居場所」の必要性和、「私たち市民が引き出す・自立に導く」から福祉を考える

- ・高齢者、障がい者、困窮する隣人を「引き出す」「心の扉を開く」「背中を押す」...の方法を考える。
- ・自分の役割、存在感(ソフト&ハード)が分かる社会をつくるための「アクション」と「仕組み」を考える。

(福祉のソフト面の現状)

- ・地域福祉を地域と社会福祉協議会で進めている。
- ・地域では、地縁の「自治会」が重要だが市は主に自主防災に力を入れているように思う。思いやりの「心の再生」(心・力)が求められる。
- ・その子の成長を見て欲しい、他と比べない。子どもになぜかを教える。書物では学ぶ限界がある。
- ・心力、徳育が大切。思いやりの欠乏。
- ・福祉の基本はノーマライゼーションの社会をつくりあげること。
- ・地域で声かけ、挨拶を運動化していく。

(福祉のハード面の現状)

- ・寝屋川市はハード面は出来ていると思う。
- ・基本的に、集まる場や施設は足りているのではないか。これからは「バリアフリー」が課題となっている。

(福祉の課題)

- ・ソフト・ハード共に努力は見られるが、福祉の課題は山積み。
- ・2・6・2の法則(パレートの法則)の、2割(自分からやりたい:自燃)、6割(働きがあつて:可燃)、2割(絶対動かない:不燃)の「不燃の2割」が課題。ケースによっては「放

っておいてほしい」という当事者の想いもある。

- ・まず、つながりをつくり、声を掛けることから始まる。第一歩が踏み出せたら、人間関係がついてくる。
- ・認める、メリット（やりがい）を付けて、相互啓発や世代の交流（老人から子どもまで）でコミュニケーションが深まる。
福祉ボランティアの人材確保が重要課題。
- ・心を開いて欲しい（外に、一対一でも）、一箇所穴を開ける 繰り返す 突っつく人＝「キツツキさん」が求められる。
- ・教育も必要、勉強の機会、自らのスキルアップに取り組む。
- ・このような福祉ボランティアの育成が求められる。
「近所」の再生が必要と考える。
- ・心開く人は近所の人、隣近所の声かけが大切・さりげない見守りが大切。
- ・近所の思いやりの再生（心・力）から、人をどう育て増やすか。
- ・近隣住民のネットワークづくり（安否確認のシステム＝電話・電気・水道検針・郵便・新聞配達などあらゆる面での連携）。

4. おせっかいさんの増殖

- ・福祉ボランティアの育成が課題であるが、全市民に働き掛け各自の小さな気持ちや活動が大きな力となる。
- ・まず、「おせっかい」からはじめてみる。
- ・私たち市民が「引き出す（扉を開く）」「自立に導く」おせっかいから福祉を考え、動くマンパワーを質・量ともに充実・増殖していかなければならない。
- ・受け手の側では「安心」「居場所」の必要性が問われている。
- ・個々のコミュニケーションから気付きと工夫が生れてくる。その担い手を「キツツキさん」をイメージし、育成運動として取り組めないか。
- ・目標と中間ゴール決めて、続けることが大切。
このような全市民の「おせっかい」が福祉を支え、寝屋川市の特徴となるのではないか。
その担い手となる「キツツキさん」マンパワーの育成と仕組みと活動をつくる必要がある。

5. 具体提言

ねやがわ24万人『おせっかい市民の創造』に取り組みます。

このため、『おせっかい学会』を設立し、ボランティア人材の育成と生きがい創出に取り組みます。

私たちは、市民が支え支えられる福祉のまちから、ねやがわやさしいおしゃれブランドを創造していきます。

ステップ :

分野を超えてボランティア人材を育む市民活動として、『おせっかい学会』を私たちが設立し「おせっかいさん」の増殖に取り組みます 《市民》

- ・おせっかいとは、迷惑になるような余計な世話を焼くことですが、福祉の現場では「不燃の2割」の、問題を抱えているだろう隣人の「心の扉を開く」「背を押す」のおせっかいが喫緊の課題です。

『おせっかい学会』は、市民組織として発起人は「福祉部会」から広げ設立します。

- ・個々のコミュニケーションから気付きと工夫が生れてくる、そのため、多様な活動や学識経験者などとの連携に取り組みます。
- ・基本は挨拶から『声かけ一番』『見守り二番(見張りはダメ)』がモットーです。
- ・発達段階(マズローの要求の五段階説から)に応じた、第1段階：生理的欲求 第2段階：安全と安定の欲求 第3段階：所属と愛情の欲求 第4段階：尊敬と承認の欲求 第5段階：自己実現の欲求、の実践と学びの体系を構築します。
- ・おせっかい市民の『キツツキさん』を研修会などをとおして育成していきます。
- ・目標は、ねやがわ24万人『おせっかい市民の創造』です。
全市で多様な「場」づくりも進めます。
- ・商店街の空き店舗、空き農地などを活用し高齢者や障害者への貸し出しなどを行います。
- ・地域交流カフェなどの場も考えていきます。

多種多様で元気な市民活動のネットワーク形成がキーポイントです。

活動を育成：多種・多様な仲良しから、相互啓発・連携の強固なグループの活動(パフォーマンス)・発信を高める

情報を共有：それらが緻密に情報を共有する場や機会をつくる

学習を協創：そのための学習の場や機会を共有する

行政に「ボランティア推進課」を設置していただきます。《行政》

- ・多様な市民の連携のため、行政との協働が必要で窓口機能を求めます。

役割分担

[市民がすることやれること]

- ・『おせっかい学会』の設立

ボランティアの育成と仕組みの確立：『キツツキさん』の資格制度の確立と推進

[行政がフォローすること]

- ・「ボランティア推進課」の設置
- ・ボランティアの情報提供、募集、宣伝等の強化とシステムづくり

[市民・行政が協働ですること]

- ・ボランティア手帳の発行
- ・ボランティアの回数によりポイントを貯めて、ボランティア地域通貨の発行、表彰等
- ・高齢者、子育て、障害者などが集まるサロン等の活動支援と推進など

ステップ :

ねやがわ福祉ナンバーワンになろう 《市民・行政》

- ・福祉都市寝屋川をピーアール：大人から子どもまで全市民が手を携えて「寝屋川大好き」の都市を目指します。
- ・寝屋川やさしいスタイルを提唱：福祉の溢れる やさしい寝屋川おしゃれライフ を「ブランド」にしていきます。
- ・このことが、住み続けるまちのアイデンティティに醸成されます。

役割分担

[市民がすることやれること]

- ・近隣住民のネットワークづくり（安否確認等のシステム）
- ・地域での声かけや挨拶運動の更なる推進

[行政がフォローすること]

- ・寝屋川ブランド戦略として取り上げる
- ・高齢者に対する生活自立支援の推進

[市民・行政が協働ですること]

- ・寝屋川ブランド戦略を協働で作成し、アピール

ステップ :

ユニバーサルデザイン都市をめざして 《行政・市民》

- ・バリアフリーは障がい者や高齢者などの特定の人に対する特別な対策であったが、ユニバーサルデザインは全ての人が平等に公平に利用できることであり、これからはユニバーサルデザインが目標となる。
- ・やさしいおしゃれライフの環境は、まちのバリアフリーを整え、施設とまちの活用から、ユニバーサルデザインのまちが目指される。（心・力の創造と連携）
- ・このため、バリアフリーに積極的に取り組むとともに、そのソフト基盤の一つとして、きめ細かで双方向の情報媒体の「CATV」を持つことが求められています。《行政》
- ・民間施設及び公共施設（駅舎、道路、公園等）にユニバーサルデザインを推進する。

- ・ユニバーサルデザインの事例紹介、P Rを積極的に行い、優秀な民間施設に対し表彰制度を設ける。

役割分担

[市民がすることやれること]

- ・駅前の不法駐車や駐輪をなくす等、利用マナーの向上

[行政がフォローすること]

- ・民間施設及び公共施設（駅舎、道路、公園等）にユニバーサルデザインを推進
- ・ユニバーサルデザインの事例紹介、P R
- ・民間施設の表彰制度
- ・「CATV」の導入による情報提供と啓発

[市民・行政が協働ですること]

- ・バリアフリー推進での意見交換
- ・ユニバーサルデザインの研究会の設置及び協議、推進